



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	貧困当事者が語る「貧困とはなにか」：参加型貧困調査を通じて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	陳, 勝
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第15566号
Issue Date	2023-06-30
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/90222">https://hdl.handle.net/2115/90222</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	CHEN_Sheng_abstract.pdf, 論文内容の要旨



## 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称:博士(教育学)

氏名:陳 勝

### 学位論文題名

貧困当事者が語る「貧困とはなにか」

—参加型貧困調査を通じて—

本研究の目的は、貧困当事者を包摂する参加型貧困調査を通じて、貧困当事者の主体側から貧困を理解することである。

貧困研究の蓄積がより多くあるイギリスでは、1990年代以後従来の貧困研究に対して次のような批判がなされている。これまでの貧困研究は貧困の構造的側面に焦点化し、貧困は構造のせいであると指摘するが、実在の人間への配慮が少なく、貧困当事者がそこでの議論や調査から排除され他者化にされている。結果的に、貧困当事者が貧困をどのように理解しているかが明らかにされていないままに「貧困」が構築されている。これに対して、一部の研究者はこれからの貧困研究を行う際により包摂的な方法で、貧困経験者の視点を取り入れること、そしてそれを参加型の手法を通じて行うこと（本研究では、貧困当事者を包摂する参加型貧困調査とする）を提起し実践してきた。そのなかでも「Poverty First Hand」(1999)、「Commission on Poverty, Participation and Power」(2000;2002)などが代表的な調査研究であり、貧困当事者の調査への「参加」を保障することによって、貧困当事者の視点から貧困を理解するのに有効だと評価されている。

これに対して、日本では近年来貧困者自身の生活意識や貧困経験を重視し理解しようとする研究はいくつかあるが、貧困者が調査の主体となり、自分たちの関心を調査アジェンダに組み込んで自らの貧困分析を行っていくという点では十分とは言えない。こうした貧困当事者の「参加」を意識して行われた調査研究は日本ではいまだ少ない状況のなかで、日本で参加型貧困調査を実施していくにはその調査方法自体をどのように組み立てるかが一つの研究課題となる。

上記に対して、本論文の第1章では、上述のイギリスで先行した調査研究を検討し、これらの研究では次のことを実現したと考察できた。すなわち、多様な貧困当事者を調査に参加できるようにしたこと、貧困当事者が主体的に調査の話題設定や展開に加わることを可能にしたこと、貧困当事者が調査結果の編集に関与できるようにしたことである。いずれも参加型貧困調査を構成する基本課題であり、参加型貧困調査を実施するためのフレームワークを提供した。こうした示唆を受けて、本調査は属性が同一の参加者をグループに組み、グループごとに3回の集まりを持ち、グループディスカッションを通じて、参加者たちが「貧困」について自分なりの貧困分析を行うように調査を進めた。

第2章では、本調査を実施していくなかで、具体的にあった課題とこれらの課題を乗り越えるために取った方法を解説・検討した。その内容は以下の3点にまとめられる。

第1に、参加者の募集では、課題であった調査の情報伝達と環境整備に対して、中間協力者や反貧困組織の協力を受けながら、参加しやすいような調査の場所や時間の設定、金銭を含む各種サポートを行った。こうしたことによって、本調査では生活保護受給者や非正規労働者などの多様な貧困経験がある若者32名の参加者を募集でき、男性/女性、学生/社会人、日本人/外国人という参加者の属性によって8グループに分けた。

第2に、調査の進行では、話題の設定と議論の展開が課題であった。話題の設定に関して、本調査は調査の目的、主旨、大枠かつオープンな主題（「貧困に対するイメージや

理解 (1 回目)」「生活上の心配や困りごと (2 回目)」「調査の結果確認とコメント (3 回目)」を提示できるような議論のプラットフォームを作成することで、参加者たちの関心を議論できるようにした。議論の展開に関して、本調査はグループディスカッションという形式を取ることで、参加者と調査実施者、そして参加者同士の権力関係の不平等が生じることを回避し、インタラクティブな議論の進行と展開を実現し、議論のなかで参加者たちの用いた言葉を彼ら自身で説明するように促進した。

第 3 に、調査結果に関して、主に参加者の確認とコメントを経てからアウトプットを行った。その際、内容の確認だけでなく、文章をどのように表現するか、調査参加の感覚やコメントなどについての参加者たちの意見も提示してもらった。

以上によって、本調査では以下の結果を得た。

まずは (第 3 章)、貧困当事者が考えている貧困の概念と定義を表すことができた。これは主に 1 回目の集まりで議論した貧困当事者が見た「貧困」に関する内容である。ここでは、参加者たちは「貧困」その言葉自体と「貧困」と関連する言説「アンダークラス」と「社会的排除」に対して、どちらかというとながティブなイメージを持っていることがわかった。そして、「貧困」は「金銭的・経済的」「制約的」「心理的・感情的・精神的」「関係的・階級的」「労働的・時間的」「教育的」「健康的」という 7 つの側面の意味を有する概念であり、「相対的貧困」と近い定義だという参加者たちの考えが示された。

次に (第 4 章)、貧困当事者のエイジェンシーと貧困の構造上の制約を考察することができた。これは主に 2 回目の集まりで議論した、貧困当事者が経験した「貧困」、すなわち参加者たち自らが抱えている心配や困りごととその対応に関する内容である。ここでは、貧困当事者が様々な貧困問題を経験するなかで、<やりくり><反抗><脱出><組織化>という多様なエイジェンシーを発揮したことが検討できた。さらに、貧困当事者がこれらのエイジェンシーを発揮する際に、彼らが直面した貧困の構造上の「物質的・経済的」「社会的・文化的」「政治的・代表的」の側面からの制約も考察できた。

最後は (第 5 章)、貧困当事者にとっての調査参加の意味を明らかにし、貧困当事者からの調査に対する改善提案を得た。これは主に 3 回目の集まりで行った調査参加に対する貧困当事者の振り返りに基づいた内容である。今回の調査参加の意味は参加者たちにとって、まず何より普段周りの人と話しにくい「貧困」について自由に議論できたことであると分かった。そして、議論が進むほど参加者たちの貧困認識が深まり、議論自体は「だれ」が貧困議論の主体となるべきか、「如何に」貧困を議論していくべきかまで発展し、参加者たちが考えた貧困の調査研究や議論の今後の方向性と課題も示された。

以上をもって、本研究は日本における貧困当事者の視点から貧困を理解するという課題に対して、方法論の検討と実証上のトライアルの両面から、より一歩前に踏み出した。これによって、(1)如何に貧困当事者の視点から貧困を理解できるかに対して、日本では未だ前例が少ない参加型貧困調査の実証手法を解説し実践した。よって、これまでの貧困議論における貧困当事者の「排除」に異議を申し立て、貧困当事者がもう一つの貧困議論の主体として貧困の議論や調査研究に参加するアプローチを提供した。従って、(2)貧困を研究し理解していくうえで、いくつかの基礎的かつ重要な主題を検討するための貧困当事者の主体側に近い実証的なエビデンスを提供した。よって、従来の貧困議論がもたらした貧困当事者の「他者化」に異議を唱え、日本における貧困を概念化していくのに豊富な材料を提供した。一方、本論文では貧困当事者以外に、日本の研究者、政治家、メディア、貧困団体などから発した貧困議論はそれぞれが具体的にどのように行われてきたのか、本研究で明らかになった貧困当事者が語った「貧困」はそれと比較する形でどのような異同があるのかがまだ十分に検討できず、課題として残っている。